

没理想論争注釈稿(二)

坂井 健

我れにあらずして汝にあり⁽¹⁾

(明治二十五年一月、こは暗に某批評家の嘲難に答へし文なり。)

常識^{コンシエンス}無き小理想家の多きほど厄介なるものは無し。實際の事に疎き空論家の増加するは、文^{ぶん}学^{がく}の爲^{ため}にも憂^{うれ}ふべくして喜^{よろこ}ぶべきことにあらず。⁽³⁾方今の文壇を觀るに、我が方寸の小宇宙にのみ彷徨して、方十里内の実際をだにも全く知らざるが如き人少なからず。さる人々は、我が思ふ所のみを正しとして、他の謂ふ所を悉く斥け、それが小理想を尺度として、此の大世界の事をも裁断せんと企つるなり。偏見家、小理想家などといふものは是れなり。彼等は我れあることを知れども、殆ど他あることを知らざる故に、それが平生の行ひ、恰も巨人島にわたらぬガリブの如く、未だガリブを見ざるリリビューシャンの如く、豕を抱きながら臭きことを知らず、古井の底に棲みながら、天の狭きを笑ふ。此の故に、小我慢の戦ひ止む時なし。競争は人間発達の大機關なりとはいひながら、かゝる人人が小軋轢の止まぬ間は、文壇は常に麻の如くなるべし。吾人これを敷き、固より其の任にあらぬを知れども、微衷の禁じがたき由ありて、此の『早稲田文学』の巻末に、「時文評論」の欄を設け、これら方寸の宇宙に棲息して、毫も其の以外を知らざる人に、せめても方百里の現実を見せて偏見の弊を少うせんと企図す。吾人が事實の報道を先きとして、必ずしも評論を旨とせざるは、是れが爲なり。⁽⁶⁾空理を後にして、現実を先きにし、差別見を棄てゝ平等見を取り、普く実相を網羅し来りて、明治文学の未來に関する大帰納の素材を供せんとする⁽⁷⁾

も亦た此の故なり。吾人が微意こゝにあり。読者よ、時文評論の第何十頁に明治文学の活機が現れたるかと詰問することを休めよ。⁽⁸⁾活機の在否は我が評論の紙上にあらずして汝が公平なる眼中にあるべし。「時文評論」の第何篇に、明治文学大帰一、大調和の策あるぞと問ふこと勿れ。其の大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ。⁽⁹⁾乞ふ、他の方寸の世界に、徜徉せる人よ。虚心平氣『早稲田文学』の出づる毎に、文字の無味淡泊、平々凡々たるを忍びて、「時文評論」なる幾項の記事を読め、二、三、四、五篇を重ねて、汝が心、寸許広く、十数篇を重ねて、汝が心、また尺許広くなることあるべし。是れ藁の効能にして、明治文学の活機が汝の肺肝に銘じつゝあるの証拠なり。我が「時文評論」は劇業にはあらず、持業なり、其の効能の徐々たるべきは、そが持前の自然なり。吾人の本願は、大帰納の素材を供せんとするにあり、小理想をもて演釈せる空漠たる理論を語らんとはあらず。されば、吾人は今後といふとも、敢て独断家をもて居らんとはせず、寧ろ常識の報道者をもて自ら任ぜんとすべし。表面は尋常の雑誌氏となりて、裏面に暗に批判家たらんと力むべし。⁽¹¹⁾博識卓見の学者は、世間に其の人いと多かり、仏人、独人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現実の報道を旨とし、偏へにアングロ・サクソンの著実なる常見を師となすべし。是れ吾人の本旨なり。読者、希はくは此の意を諒して、吾人の評論の評論ならざる所に、評論なるべき所以の存するを知り、其の無効能なるが如き所に、冥々の効能あるべきを知れかし。⁽¹²⁾

(1) 我れにあらずして汝にあり・『早稲田文学』三号(明治二四年一月)「時文評論」冒頭に掲載。「シエークスピア脚本評釈緒言」に「全体の解釈は、読者みづから之れをなせ。」とあるが、本文は、この主張の繰り返しであり、題名もこれによると思われる。本文中「(明治文学)大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ。」の一文は、この主張を端的に表わしている。前稿34頁の注(51)参照。

(2) (明治二十五年一月、こは暗に某批評家の嘲難に答へし文なり)・「明治二十五年一月」とあるが、実際の発表年月と食い違っている。また、この傍記は、逍遙選集にはあるが、初出にはないので、竹盛天雄「没理想論争とその余燼」(『近代文学の争点 近代編』昭和四四年、明治書院)の、「(鵜外は)△某批評家△とは自分へのてあこすりではないか、と

(3)

深読みをしたふしが見られなくもない。」といった見方は成り立たない。単に、鷗外は本文の内容に自己に対する批判を感じ、その結果、「早稲田文学の没理想」を執筆したとする見解(磯貝英夫「鷗外の文学評論 道論争を中心に」『森鷗外必携』学燈社、昭和四三年二月)に「逍遙としては、日ごろの実感の素直な表白であったのだから、鷗外は、これを自分への間接な挑戦としてうけとった気配がある。そこで、かれは、ただちに筆をとって論駁し」云々とある。)に従いたい。

本文に対する鷗外の反応はともかく、「シエークスピア脚本評釈緒言」以降、本文の発表までの間、鷗外は逍遙に対しての批判めいた記事を書いてはいないので、ここで逍遙が念頭においている批判(本文に「読者よ、時文評論の第何十頁に明治文学の活機が現れたるか」と詰問することを休めよ。」「時文評論」の第何篇に明治文学大帰一、大調和の策があるぞと問ふこと勿れ」とある。)は、鷗外以外の批評家によってなされたと考えるべきである。

ただし、鷗外は、「早稲田文学の没理想」(『柵草子』明治二十四年二月)に「明治文学の活機を悟り、以て明治文学一大調和の策を立てよ」と「我れにあらざりて汝にあり」の一節を引き、「付記 其言を取らず」(『柵草子』同前)で「理を談ずるを聞くことだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯実を記したるのみを見て悟れといはむは、おそらくは難題ならむ。」と難じており、これが本文の内容に対応しているかのように見えるのは事実である。後に逍遙が誤ってつけた「明治二五年一月」という日付から見て、逍遙自身が、竹盛氏のこのような勘違いをしていた、ということも、考えられなくもない。

常識無き小理想家……喜ぶべきことにあらず・偏見や好悪による勝手な批評の弊害については、逍遙は早くから批判していた。「批評の標準」(『中央學術雑誌』五八号、明治二〇年九月)に、「我国今日の批評学ハ(中略)幼稚なる批評学といはざるを得ず其名ハ批評なりといふと雖も其実妄批たるに過ぎざるなり(中略)批評にして其正鵠を得ず、妄に善著述を難駁し若くハ悪著述を称揚する等の事あらんにハ前述の文学を害する事実ハ小少にあらざるべければなり。(中略)今の所謂批評ハなか／＼正当の判断とハマあらず多くハ批評家の独断(ドグマ)に基き若しくハ感情(好嫌心)に拠る者のみなり。」とある。なお、「実際のことと疎き空論家」という語には、実作に携わらず、評論のみを行なう批評家に対する批判意識がうかがえる。似たような意識は鷗外にも見られ、「逍遙子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及梓神子」(『柵草子』明治二十四年九月)で、石橋忍月・内田魯庵・野口寧斎と逍遙・露伴を対置して、「ひとりはずて詩人たりし人にて、ひとりは今なほ詩人たる人にしあれば、いづれも阿堵中の味え(注 創作の機微)も知らざる輩と

は、日を同うして論ずるべからざらむ由あらむ。」と述べている。

(4) リリビューション・「ガリヴァー旅行記」の中の小人国リリパットの住民、

(5) 文壇は常に麻の如くなるべし・麻が乱れもつれるように、文壇が混乱してしまふに違ひない。

(6) 吾人が事実の報道を先きとして、必ずしも評論を旨とせざるは、是れが為なり・『早稲田文学』創刊号巻末に「『早稲田文学』は公平なる報道者をもて自ら任ぜんとす」とある。狭い見地から、いたずらに批評をする前に、まず十分な材料をそろえようというのである。

(7) 明治文学の未来に関する大婦納の素材を供せんとする・独断的な批評をするのでなく、「記実」(事実をありのままに記すこと)によって、読者に対して「大婦納の素材」を提供しようとするのが、『早稲田文学』の目的だ、という逍遙の主張である。だが、後に鷗外の「逍遙子が記実の文を読むには、大婦納力を具へざるべからず。」(『早稲田文学』の没理想)「『桐草子』明治二十四年二月」という批判を呼ぶことになる。

(8) 読者よ、時文評論第何十頁に明治文学の活機が現われたるかと詰問することを休めよ・逍遙は、独断的な批評を読者に押し付けるのではなく、読者が判断するための材料を提供するのが意図なので、「時文評論」そのものに「明治文学の活機」を求めるのではなく、それを読むことによって知識を増し、徐々に読者自身がかんでゆくべきだ、と主張したのだったが、こうした姿勢に反発したのは、鷗外だけではなかったようだ。

斎藤緑雨は『国会』(明治二十四年一月二八日)で「(前略)『早稲田文学』と称する由の、明治文学全体に関する雑誌出でたり勇ましのおん事や(中略)時文評論は明治文学に関係ある百般の事実を報道し至公至平の評論を加ふるものとか初号は多く『過來し方』に就て云はれたれば左迄新なる評論を見ざれども思ふに編者は順を遂ふて近きに評じ到らんとするものなるべければやがて二号、三号に及びて所謂「活機の存する所」を明らかにせらるゝなるべし(中略)今は先づ其労を謝し其誕生を賀し併せて永く文壇を益せんことを望むまでなり何となれば予は其評論のよきとあしきとを問はず斯る文学雑誌の続々世にあらはれて相互ひに錬磨する間におのづから我文壇の智識の増進すべきを信ずればなり慶すべし慶すべし」と述べている。

緑雨の文章は、「嘲難」とまではいえないかもしれぬが、手放しで誉めているように見えて、ところどころに棘がかくされている。「勇ましのおん事や」、「至公至平の評論」、「慶すべし慶すべし」は明らかに皮肉だし、「其誕生を賀し」といっているが、その理由はというと「其評論のよきとあしきとを問はず」自分は歓迎するといっているのだ。悪い

評論はない方がよいというのが、逍遙の主張だから、それに対しては皮肉になっているのである。しかも、縁雨は、創刊号の「時文評論」には「明治文学の活機」は、少しも現われていない、もつとも、二号、三号には、明らかにするつもりなのだろうが、と揶揄しているのだ。恐らく、逍遙はこうした揶揄を念頭において、本文を草したのである。逍遙は「鳥有先生に謝す」(明治三十五年一月)でも以下のように述べている。「夫の記実を重んじて談理の後にすべきをいふや、談理を斥けんとしてしかいひたるにはあらず、『早稲田文学』一二冊の中に時文の活機勢を看出ださんと望むものの極めて謬妄なるを弁すると同時に、世の小理想を是れよろこび毫も他を顧みざるものを難ぜしのみ。」

他に、これに類するものとして石橋思案の文章があげられる。「如何なる魔風やお氣にくはざりけん、春煙屋の大人が、こたび「編輯主任」の銘打つたる早稲田文学は、去る二十五日始めて其首巻を此世に出現したり。アラ尊うと！光輝燦然四方を射る、僕も亦随喜の泪にむせぶの一人なり、(中略)南無や早稲田如来像、慈悲の眼を垂れ給ひ、僕が愚直を憐れみ為に文運長久のお利益を下し賜ひてよ！」(中略)就中、『時文評論』の……活機の存する所を明にしをさをさ偏頗の弊を矯めて彼の時勢を察せずして徒に死文に泥み若くは流行を追く者を提醒せん」とす、読み来つて恭きまでに感奮して思はず泪こぼるゝ。(中略)此欄を一読するものには、一目現代我国の文学現象を測知する事を得ん、茲に至て、早稲田文学の我が文学に功労ある事実掩ふ可からず、初号にして斯の如し二号三号と進みなば如何なる処にまで其感化力を及ぼさん、喜ぶべき哉。(以下略)」「読売新聞」明治三十四年十一月一日)

一見、誉めちぎっているようだが、戯文であることも手伝ってか、かえって皮肉に感じられよう。

(9) 其の大師一の無上の良策は……汝が没理想の心中にこそあるべけれ・本論の主張だが、後に、鵬外から「理を談ずることだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯実を記したるのみを見て悟れといはむは、おそろくは難題ならむ。」(「早稲田文学の没理想」との批判を受けることになる。

(10) 敢て・「決して」の意味で取りたい。

(11) 仏人、独人の長ずる所は、吾人之を悉く彼の人々に委ね去りて・直後に「アングロ・サクソンの著実なる常見」とあるように、ドイツ・フランスの観念的批評とイギリスの経験的批評を対置させている。このあたりも、鵬外の批判を呼ぶ、一つの大きな原因になったのではないか。

(12) 吾人の評論ならざる所に……冥々の効能あるべきを知れかし・ここにも、無なるがゆえに有、という没理想的論理を見ることが出来る。

早稲田文学の没理想⁽¹⁾

逍遙子⁽³⁾この頃記実家⁽²⁾となりて時文評論を作る。時文評論とは早稲田文学の一欄にして、現実を記するを旨とするものなり。逍遙子は何故に記実家となりたるか。曰く談理を嫌ひてなり。逍遙子は何故に談理を嫌へるか。曰く理の実より小ならむことを慮りてなり、理想世界の現実世界より狭からむことを思議してなり。その言にいへらく。今の談理家の言ふところは空漠にして、その見るところは独断に過ぎず。今の談理家はおの／＼おのが方寸の小宇宙に彷徨逍遙して、我が思ふところのみを正しとし、これを尺度として大世界の事を裁断せんとす。そのさま恰も未だ巨人島にわたらぬガリワルの如く、また未だガリワルを見ざる「リリビエウシヤン」の如く、家を抱いて臭きことを忘れ、古井の底に栖みて天を窺ふ。かゝる小理想家の説くところ何のやくにか立たむと。

(1) 早稲田文学の没理想・逍遙「シエークスピア脚本評釈緒言」、「我にあらすして汝にあり」への批判であるが、特に、後者に触発されたところが大きいようである。『柵草子』二七号(明治二十四年二月)掲載。

(2) 記実家・事実をありのままに記せうとする人。「記実」は「談理」の対。逍遙は、偏った批評を排し、事実の細道に従事すると宣言していた。

(3) 時文評論とは……現実を記するを旨とするものなり。「早稲田文学」発行の主意(創刊号)に「『時文評論』の欄を置きて苟も明治文学に関係ある百般の事実を報道し且至公平なる評論を加へて活機を存する所を明にしをさ／＼偏頗の弊を矯めて彼の時勢を察せずして徒に死文に泥み若くは流行を追ふ者を提醒せんとす。」とある。

(4) 談理・理を談すること。議論。「記実」の対。

(5) 理の実より小ならむことを慮りてなり、理想世界の現実世界より狭からむことを思議してなり。逍遙は、あらゆる「理」を排し、理想世界を貶めたわけではなく、偏った「理」、狭い「理想」を非難しただけなのだが、鵬外は、ここで問題を一般化してしまっている。これに対して、逍遙は「夫の記実の重んじて、談理の後にすべきをいふや、談理を斥けんとしてしかいひたるにはあらず、(中略)世の小理想を是れよろこび毫も他を顧みざるものを難ぜしのみ。逍遙子不敏なりと雖も、軽々しく実と理との優劣を断定せんや。」(烏有先生に謝す)明治三十五年一月と并じている。

(6) リリビュウシャン・『ガリヴァー旅行記』の小人島リリバットの住人・前出。

(7) 小理想家・偏った見方をする人。直前の比喩は、すべて自己の狭い考え方に固執し、その誤りに気付かない者を例えているものである。なお、「我れにあらざして汝にあり」に「我が方寸の小宇宙にのみ彷徨して、方十里内の実際をだにも全く知らざるが如き人少なからず、さる人々は、我が思ふ所のみを正しとして、他の謂ふ所を悉く斥け、そが小理想を尺度として、この大世界の事をも裁断さんと企つるなり。」とある。

逍遙子はかく理を談ずることを斥けたり。されどその理を談ぜざるは、談ぜざるを以て談ずるなり。その作るところの時文評論は評論にあらざる評論たらむとす。⁽¹⁾その人を教ふる手段にいはいく。我れは実を記して汝に帰納の材を与ふ。⁽²⁾汝が眼、汝が心はおのづからこれを帰納して、明治文学の活機を悟り、以て明治文学大帰一大調和の策を立てよ。⁽³⁾汝の機を悟り策を立てることを得るに至るは、或は遅からむ。そは我手段の劇薬ならざるためなり、持案たるためなりと。⁽⁴⁾

(1) されどその理を談ぜざるは……評論にあらざる評論たらむとす・無なるが故に有という没理想的論理を鵬外もここで感じとっているようである。前述。

(2) 我れは実を記して汝に帰納の材を与ふ・「我れにあらざして汝にあり」に「空理を後にして、現実を先きにし、差別見を棄て、平等見を取り、普く実現を網羅し来りて、明治文学の未来に關する大帰納の素材を提供せんとす」とある。

(3) 汝が眼、汝が心は……明治文学の活機を悟り、以て明治文学大帰一大調和の策を立てよ・『早稻田文学』発行の主意(創刊号)に「活機の存する所を明にし」云々とあり、「シエークスピア脚本評釈縮言」(同前)に「若し夫全体の解釈は、読者みづから之れをなせ」とあるものの、「我れにあらざして汝にあり」ほどの強い言い方ではなかった。前述したように、「我にあらざして汝にあり」は斎藤緑雨などの批判に対してのものであったため、逍遙の発言が勢い強い調子になり、そのため、逍遙にとっては予想外であったろうが、鵬外を刺激し、その結果、この論争が起こったとも言える。換言すれば、結果的にではあるが、緑雨こそが、この論争の仕掛人なのである。

(4) 汝の機を悟り策を立てることを得るに至るは……劇薬ならざるためなり、持案たるためなりと・「我れにあらざして汝

にあり」に「我が「時文評論」は劇業にはあらず、持業なり、其の効能の餘々たるべきは、それが持前の自然なり。」とある。

時文評論を読む人は、いづれの処よりか此大帰納力を得来たるべき。いはく心中没理想これなり。⁽¹⁾時文評論を書く人は、いづれの処よりか其大記実力を得来るべき。いはく常識これなり、常見これなり。⁽²⁾

(1) 時文評論を読む人は……いはく心中没理想これなり。「我れにあらずして汝にあり」に「時文評論」の第何編に、明治文学大帰一、大調和の策あるぞと問ふこと勿れ。其の大帰一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ。」とある。

(2) いはく常識これなり、常見これなり。「我れにあらずして汝にあり」に「常識(注 コンモンセンスのルビあり) 無き小理想家の多きほど厄介なるものは無し。」、「みづからは諄々として現実の報道を旨とし、偏へにアングロ・サクソンの著実なる常見を師となすべし。」とある。

常識、常見の何物なるかは、よくも知らず。逍遙子はたゞ「コンモン、センス」といふ一英語を示しゝのみなればなり。⁽¹⁾没理想の何物なるかはシエクスピイア脚本評註の緒言に見えたり。その言にいはく。造化は無心なり。自然は善惡のいづれにも偏りたりとは見えす。固より意地悪き継母の如きものとも見えねば、慈母とも見えす。さるに数奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此世を穢土と罵り、世界と誦るなり。さて亦得意の人はこれに反して造化を情深き慈母のやうにおもひて、此世を樂園とおもへり。必竟人々の思倣し次第にて、苦とも楽とも見らるゝが自然の本相なり。此故に造化の作用を解釈するに、彼宿命教の旨を以てするも解し得べく、又耶穌教の旨を以てするも解し得べし。其他老、莊、楊、墨、儒、仏若しくは古今東西の哲学者がおもひ／＼の見解も、これを造化にあてはめて、強ち当らざるにあらず、否、造化といふものは、此等無数の解釈を悉く容れても余あるなり。祇園精舎の鐘の聲、浮屠氏は聞きて寂滅為樂の誓なりといふべきが、待宵には情人が何と聞くらむ。沙

羅双樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらむが、愁を知らぬ乙女は何さまに眺むらむ。要するに造化の本意は人未だこれを得知らず、只おのれに愁の心ありて秋の哀を知り、前に其心楽しくして春の花鳥を樂しと見るのみと。

(1) 常識、常見の何物なるかはよくも知らず。逍遙子はただ「コンモン、センス」といふ一英語を示し、のみなればなり。前の注にも触れたが、「我れにあらすして汝にあり」において「コンモンセンス」は「常識」のルビとして唐突に現われ、常見も「アングロ・サクソンの著実なる」という修飾をともなつて語られるだけで、詳しい説明はない。したがって、鷗外の言い分も一見もつともではあるが、鷗外がこれらを本当に知らなかった訳がなく、良く言えば、逍遙自身の言葉での説明を求めているといえるし、悪く言えば、揚げ足をとっているともいえる。いずれにせよ、ドイツ風の理想主義的批評を主張する鷗外が、「アングロ・サクソンの常見」や「コンモン・センス」を、何の躊躇もなく前面に押し出す逍遙の態度に、穏やかならざる気持ちを感じたとしても無理はない。

(2) 以下は、「シエクスピヤ脚本評註緒言」第五形式段落冒頭部分の要約である。前稿（『没理想論争注釈稿（一）』）（『文芸言語研究 文芸篇』21、筑波大学文芸・言語学系、一九九二年三月）24～34頁参照。

造化すでに没理想なり。⁽¹⁾造化に似たる没理想の詩を作るものは大詩人なるべし。こゝに於いてや人にはシエクスピヤを取り、体には「ドラマ」を取る。⁽²⁾シエクスピヤがバイロン、スウィフトより大なるは彼は理想なく、此はおの理想をあらはせばなり。「ドラマ」の小説より全きは、彼は理想なく、此は作者の理想を含みたればなり。作者能く理想無きに至るときは、人に神の如くにもおもはれ、聖人の如くにもおもはれ、至人の如くにもおもはるべし。⁽³⁾近松も没理想なり。彼も境遇次第にては、たとひシエクスピヤには及ばずとするも、我國の浄瑠璃作者にて終らむよりは迥に優りたる位地に上りぬらむ。「キング、リヤア」の悲劇は馬琴の作に似て勸懲の旨意いと著く見えたれども、作者みづからが評論の詞、絶えて篇中になきゆゑ、見るものゝ理想次第にて強ち勸懲の作とも見做すを要せず、別に解釈を加ふること自在なり。⁽³⁾然るに曲亭の作を見れば、例へば墓六夫婦の性格

の如き、頗る自然に似て活動したれども、作者叙事の間にて明に勸懲の旨なりといへれば、人も亦これを没理想と評することは能はずと。

(1) 造化すでに没理想なり・以下本形式段落末までも「シエクスピイア脚本評註緒言」第五形式段落の要約。

(2) 体には「ドラマ」を取る・「シエクスピイア脚本評註緒言」に「恐らくはシェークスピヤと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉くいへば、小説の体にて綴りしならば、幾段か値段を下しなるべし。」とある。

(3) バイロン、スキフト・バイロンは「理想」を主とする「叙情詩人」とされ(前稿参照)、スキフトは諷刺で名高い。

(4) 作者能く理想無きに至るときは、人に神の如くにもおもはれ、聖人の如くにもおもはれ、至人の如くにもおもはるべし・二葉亭や嵯峨の屋と共通の見解。前稿参照。

(5) 「キング、リヤア」の悲劇は……別に解釈を加ふること自在なり・戯曲の体裁は、作者が登場人物に対して、評価をしないので、読者の解釈は自由となる、との逍遙の主張だが、これでは戯曲というジャンルが他の文学のジャンルに対して優越性を持つことになる。鵬外はここに抵抗を覚えた。

(6) 然るに曲亭の作を見れば……これを没理想と評すること能はずと・小説という形式では、作者が登場人物に対する評価をしがちだから、それによつて読者の受取り方が決まつて来る、との逍遙の考え。これも、文学のジャンルに優劣をつけることになるので、鵬外は反発した。

夫れ造化既に没理想なり、作者と詩と皆没理想になりたれば、逍遙子が没理想の時文評論を作れるも宜なり。(1)

世の批評家はおほしといへど、逍遙子がこたびの大議論を聞きては、皆口をつぐんで物言はず。偶々物言ふ人ありといへども、唯賞讃のこと葉を重ねて、真価を秤らむとするに至らず。(青年文学第一の成語) 平生批評を専にせざる人々の中には、多少これに対して意見を述べたる人ありといへども、大抵片言隻句にして、人の心をあかしむるに由なし。おのれも大同小異の見を懷いたれば、自然、没理想の論に少なからぬ同意を表したしといふは美妙斎なり。(国民新聞) 読者の没理想をたのみて、時文評論を評論ならぬ評論となし、記実となすと聴きて、これに服したるは連山人なり。(読売新聞) シエクスピイアを没理想とする論、若し逍遙子が独造の見ならば、

これを欧文に訳して欧人に見せまほしといふは抱一庵主人なり。(報知新聞)⁽⁵⁾この三人はおもなる讀者なるべし。撫象子のいはく。シエイクスピヤが理想はいと大きやかなりしを見て、没理想なりといふは誤なり。シエイクスピヤは予言者なりき。予言者とは大理想家をいふなりと。(女学雜誌第二九〇号)⁽⁶⁾これを一人の難者とす。不知庵主人のいはく。没理想は極めて好文字なり。然れども春の屋は没理想といふ理想を立てたるなり。是れ或は真理に近からむかは知らねど、われ未だ遽に同意することを得ずと。(国民新聞)⁽⁷⁾これを一人の痴癡者とす。実を記して評論に代ふる逍遙子が趣意に漣山人の服せしを、特書して表しだいし、正直正太夫といふものあり。(国会)⁽⁸⁾これを一人の傍觀者とす。

(1) 夫れ造化既に没理想なり……逍遙が没理想の時文評論を作れるも宜なり・造化が没理想であつたなら、詩人はこの「没理想」を悟ること、で、「没理想」の作品を作らなければならない訳だから、批評家も「没理想」の立場で批評しなければならぬという逍遙の論理を認めた上で、その大前提である造化無理想を論駁しようとする鷗外の布石を見ることができよう。

(2) (8) 青年文学第一の成語(国会・(2)以下(8)まで、三好行雄注釈『近代文学注釈大系 森鷗外』(有精堂、昭和四一年)の注、補注参照。なお、三好行雄注釈『近代文学大系 森鷗外集I』(角川書店、昭和四九年)にも同様の注釈がある。

(以下次号)

(付記) 本稿を草すにあたっては、「鷗外全集」(岩波書店)、「逍遙選集」(逍遙協会)を底本とし、必要に応じて初出を参照した。